

教育・学校心理学B（学校心理学） 2018～		科目コード	FE3548
単位数	履修方法	配当年次	担当教員
2	R or SR (講義)	2 年以上	中村 恵子

※2018年度以降に入学した方が対象の科目です。2017年度以前に入学した方は2018年度は履修登録できません。

※本科目のスクーリングは、2017年度以前入学者にはp. 254「特講・福祉心理学4（スクール・カウンセリング）」(科目コード：FT2604、単位数：1、履修方法：S)として開講されます。

科目の概要

■科目の内容

教育臨床での専門職は、いまや教師だけでなくスクールカウンセラー、支援員、相談員、スクールソーシャルワーカーと多様化し、そのチーム援助が求められる時代になりました。本科目では、教育現場において生じる問題およびその背景を理解し、子どもの適応支援の方法について学びます。スクーリングでは、事例から学校不適應によって生じる問題と、その適応支援の方法論を学びます。レポート学習では、教科書を読んで適応支援の方法と課題についての学びを深めます。

■到達目標

- 1) 教育現場において生じる問題を説明できる。
- 2) 教育現場において生じる問題の背景を説明できる。
- 3) 学校適応条件を説明できる
- 4) 学校不適應の子ども支援の方法を説明できる。

■教科書

中村恵子編著『学校カウンセリングー問題解決のための校内支援体制とフォーミュレーション 第2版』ナカニシヤ出版、2011年

(スクーリング時の教科書) 上記教科書は必ず持参してください。

■「卒業までに身につけてほしい力」との関連

教育臨床では、とくに、「総合的な人間理解力」、「批判的・創造的思考に基づく問題発見・解決力」「集団理解に基づく対人調整力」を身につけてほしい。

■科目評価基準

レポート評価40%+スクーリング評価or科目修了試験60%

■参考図書

田上不二夫著『不登校の子どもへのつながりあう登校支援: 対人関係ゲームを用いたシステムズ・アプローチ』金子書房、2017年

水野治久・石隈利紀他著『よくわかる学校心理学』ミネルヴァ書房、2013年

田上不二夫著『実践 グループカウンセリングー子どもが育ちあう学級集団づくり』金子書房、2010年

小林正幸著『事例に学ぶ不登校の子への援助の実際』金子書房、2004年

スクーリング

■講義内容

回数	テーマ	内容
1	教育現場において生じる問題とその背景	不登校の増加と長期化およびその課題
2	教育臨床に有効なカウンセリング技法	発話を促す基本技法
3	教育臨床に有効な集団援助技法	対人関係ゲームの理論と演習
4	学校適応に求められる要因	学校適応の条件
5	学校適応に求められる発達課題	愛着形成～嫉形成～母子分離
6	学校不適応の理解	不登校事例の問題分析
7	学校不適応への援助方法	不登校事例の介入計画作成
8	質疑応答	
9	スクーリング試験	

■講義の進め方

- ・パワーポイントおよび配付資料を中心に講義を進めます。教科書は参考程度に使用します。
- ・授業では事例を提示し、グループでのディスカッションを中心に読み解きます。

■スクーリング 評価基準

- ・とくに学校適応条件についての理解を問います（教科書・配付資料持込可）。
- ・授業への参加態度30%＋スクーリング試験70%（論述式）

■スクーリング事前学習（学習時間の目安：3～10時間）

教科書の1章～3章は読んできてください。

レポート学習

■在宅学習15のポイント

回数	テーマ	学習内容	学びのポイント
1	学校カウンセリングの役割	P. 1～3 学校カウンセリングの目的は子どもの学校適応上の問題解決にある	個別支援と集団支援の両方が求められる
2	チームでの協働支援	P. 3～6 チームで解決をはかる児童生徒支援システム	共通理解が必要な専門用語を学ぶ
3	教師とスクールカウンセラーのコラボレーション	P. 6～9 集団支援の専門家＝教師 個別支援の専門家＝カウンセラー	教師とスクールカウンセラーの専門性を生かす
4	校内支援体制と教育コラボレーション	P. 9～12 児童生徒支援システム	システム理論
5	教育コラボレーションによる再登校支援(1)	P. 12～17 チーム支援の実際	保護者・生徒・集団へのチーム支援
6	学校適応の条件	P. 35～36 学校生活を支える適応条件	学校環境と家庭環境
7	学校適応のための発達課題	P. 36～38 学齢期までの発達課題	対人関係の発達
8	価値のトライアングルと学校適応	P. 38～40 価値観のバランス	価値観の偏り
9	学校環境への適応システム	P. 40～42 学校環境と家庭環境のはざままでバランスをとろうとする子ども	個人と環境の相互影響
10	学校環境と問題解決システム	P. 42～45 不登校生徒への再登校支援	学校適応条件
11	学校不適応をつくる問題システム	P. 45～46 問題システムの構成要因	子ども・学校環境・家庭環境の相互影響
12	問題解決フォーミュレーション	P. 46～51 学校環境と家庭環境それぞれのフォーミュレーション	当事者支援と支援者支援
13	教育コラボレーションの意義	P. 53～54 コラボレーションの極意	教育コラボレーション
14	教育コラボレーションによる再登校支援(2)	P. 54～57 チーム支援の実際	保護者・生徒・集団へのチーム支援
15	教育コラボレーションの役割と効果	P. 58～59 チーム支援の条件	チーム支援の役割

■レポート課題

1 単位め	『客観式レポート集』記載の課題に解答してください。
2 単位め	教科書 p. 12～17の事例から、チーム支援に必要な条件を論じなさい。

※提出されたレポートは添削指導を行い返却します。

■アドバイス

1単位め アドバイス

教科書をよく読み、別紙の客観式レポート課題に解答してください。「TFUオンデマンド」上で解答することも可能です。

2単位め アドバイス

(1) 書き方について

レポートは、以下の順序で最初に結論を述べてください。

- 1) 結論 チーム支援に必要な条件として以下のことがあげられる（箇条書き）
- 2) 本論 箇条書き条件の説明
- 3) 総括 これらの条件を用いることの意義と効果
- 4) 事例についての感想

1)～3) まだが小論文形式のレポートの書き方です。論文の価値は、論点の正確さと論理の明瞭さにおかれます。ここに個人の意見や感想を交えてはいけません。論文では、必ず文献（本や論文）を読み、そこにどのように書かれていたから、このようなことが考えられると、根拠を示してそこから導かれる結論を述べるのが求められます。また、直感による個人的な意見や感想を交えず、複数の文献による根拠から結論を導くことを「論じる」といいます。この論理の客観性と明瞭性が論文の価値の決め手になるのです。文献ではなく直感のおもしろさによる個人の意見や感想に価値がおかれるものは、随筆と呼ばれ、論文とは本質的に異なります。このレポートでは、4) で感想を求めておりますので、ご自身の意見や感想はこの欄にまとめて記述してください。解釈がおもしろいほど論理の展開もおもしろくなるはずなのです。

論文では、客観性と明瞭性を高めるために、できるだけ箇条書きでまとめることをお勧めします。箇条書きでの結論を導く場合は、通常3項目程度にまとめます。5項目を超えると、箇条書きでまとめるまでもなく冗長で焦点が絞られないものになってしまいがちだからです。仮に4項目以上の条件を考えた場合は、さらにその項目を3項目以内に整理統合し、本文で条件の内容を説明してください。ただし、文献からの引用の場合は、読者の解釈で勝手に整理統合するわけにはいきませんから、文献を明示してそのまま引用してください。引用では、たとえば中村（2011）は、…（本文の引用）…もしくは、…（本文の引用）…（中村、2011）などと出典を明示し、巻末に引用文献を、本の場合①著者②出版年③タイトル④出版社の順で、論文の場合①著者②出版年③タイトル④研究誌名⑤巻号⑥掲載ページの順でお書きください。教科書の本文と巻末の引用文献をご覧いただくと、書き方が理解できるのではないかと思います。また、文献からの引用をそっくり結論に持ち込むのは、論じていることになりませんから、必ずそれを参考にして3項目以内に結論としてまとめ、その論拠として文献の内容を示してください。

次に、本文では、その条件とはどのような内容なのか、なぜそれが必要と考えたのか、そこにはどのような意味があるのかを説明してください。また、もしそれをういかなかった場合は、どのようなことになるのか、用いた場合はどのような効果が期待できるのかを説明し、論拠を示してください。この内容の豊かさが論文の質的価値をつくります。

そして、最後に意味と役割について説明して総括してください。

(2) 内容について

テーマである「チーム支援」は、教科書9～12ページに「教育コラボレーション」としてまとめられています。

コラボレーションとは、異なる立場の専門家が、対等な立場で同じ目標や問題解決に向けて共同作業を行うことをいいます。学校カウンセリングの目的は、学校に不適応を起こしている子どもの適応支援にあります。学校適応とは、相談室や保健室など個別支援に対する適応ではなく、学級での集団に対する適応のことを指します。そのため、不適応状態にある子どもの適応支援をするためには、まず不適応によって傷ついている子どもに対する個別の立ち直り支援が必要です。そして、子どもの状態が回復したら学級復帰のための支援を行うことで完結されます。しかし、子どもが適応感を得られないまま我慢させて学級に復帰させる事態は避けなければいけません。さらに子どもの傷を深くするからです。

それでは、子どもの適応支援として何をすればよいのでしょうか。そのためには、個別支援の専門家であるスクールカウンセラーと、集団支援の専門家である担任教師とのコラボレーションが必要です。また、コラボレーションのためには、教師とスクールカウンセラーを結びつけるコーディネーター役割も重要です。そこで、以下を参考に異なる立場の専門職について理解し、教職員がチームを組み協働で支援することの意味と役割を論じてほしいのです。

- ①担任の専門性 59～61ページ
- ②コーディネーターの専門性 63～66ページ
- ③スクールカウンセラーの専門性 67～69ページ

また、コラボレーションの意義と極意については53～54ページを参考にしてください。

(3) レポートを書こうとしてもやる気がわかないとき

空腹のときは、脳に栄養がいきわたらないせいかやる気が起きません。しかし、逆に満腹のときもなぜかやる気が起きません。また、脳に栄養を与えるとやる気がわくような気になることも稀にあります。受験生は、脳に栄養を与えるためにあめやチョコレートやブドウ糖をポケットにしるのぼせると効果的だと才色兼備のほまれ高い某高学歴女優がテレビで語ってくれました。筆者の経験では、チョコレートはないとやる気がわきません。芋けんぴとおせんべいも必須です。それに睡魔との闘いになるので、コーヒーも不可欠です。そして、ここまでやったら寝ても良いというゴールの設定もないとイヤになってしまいます。そして、ゴールまでできたら苦悶の心身をアルコールで潤し、よく寝て明日の苦戦に備えましょう。

これを読むと、健全な読者ほど「病んでいる」と思われるかもしれません。論文は、美容と健康と社交の大敵だとしみじみ思います。なぜ、こんなつらくてかなしい論文を書く道が好き好んで選んでしまっているのでしょうか。しかし、きっとそれが研究者に与えられた宿命なのです。皆様も、レポートに苦しむほ

ど、よりリアルに研究者のつらさ苦しさを実感していただけることと思います。皆様の善戦を心からお祈りしております。

科目修了試験

■評価基準

- ・評価の観点は、理解の正確さです。
- ・教科書や解説文を良く読んで対策してください。